

12

中等教育における外国語コミュニケーション能力向上のための複言語教材開発研究

— 中学・高校生対象『私の気持ちを伝えるために — 初級複言語単語集 —』の作成 —

白井聖大 (関東国際高等学校)

1. はじめに

新学習指導要領における「外国語科」の教科目標にもあるように、これからの中等教育の現場においては外国語を通じたコミュニケーション能力の育成が強く求められている。その実現のためには、言語や文化に対する興味を抱き、積極的に理解を深めようとする意識を育む環境作りが必要になるであろう。

昨今、街中で英語以外の言語を目や耳にする機会は増えた。看板や案内板に用いられる外国語も、英語以外に中国語や韓国語が併記されるのが普通である。その理由は、それを必要としている人がいるからに他ならない。子ども達を取り巻く環境は間違いなく多言語・多文化へとシフトしている。

こうした環境の下、共通言語としての英語運用能力の向上への取り組みは、意思疎通のためにも必要なことである。だが、正確な意思の疎通がコミュニケーションの最重要項目かと言えば、必ずしもそうではない。多言語・多文化環境において、英語は共用のコミュニケーション・ツールではあるが、お互いにとって母語ではない。相手にもう一步深く立ち入るためには、相手を積極的に理解しようとする意思表示が必要だ。その最たる表現手段は「相手の母語で語りかける」ことに他ならない。それにより相手の心の扉はより大きく開かれる。開いた心の先にこそ、真のコミュニケーションの輪が広がるはずである。複言語学習の意義はここにある。

上記の外国語学習環境を鑑み、筆者の勤務する関東国際高等学校の外国語教育に携わる教員が中心となり、中学・高校生を対象とした『私の気持ちを伝えるために — 初級複言語単語集 —』の作成を計画した。この教材が、多様な言語学習の普及に寄与できればと願う。

2. 気持ちを伝える『初級複言語単語集』作りの立脚点

2-1. どのような単語を学ぶべきなのか ～単語と表現の採用基準～

本職が勤務する関東国際高等学校ではかねてより英語以外の外国語、特に日本の近隣諸国の言語に着目し、1986年に外国語科中国語コースを開設して以来、これまでにロシア・韓国・タイ・インドネシア・ベトナムの計6言語コースを設置してきた。各コースでは英語および英語以外の専攻言語を1～2年次に必修でそれぞれ6単位ずつ学んでいる。また3年次には英語4単位、専門言語3単位を必修とした上で、どちらか6単位分を選択科目として追加履修が可能となっている。すなわち、週の4～5割の授業が外国語という学習環境である。

また、ホームルームに各コースの生徒が混在し、帰国子女や在日外国人子女も多数在籍するため、生徒達にとっては日常的に複数の言語が飛び交う環境でもある。そのため、専攻言語以外の言語や文化に興味を示す生徒も多く、総じて在学中にコミュニケーション能力の高まる生徒が多い。

また、学習効果を高めることを目的に、2008年度からは中国語・ロシア語・韓国語の3コースにおいて、E-learning ソフトを利用した自律学習を促す教材を作成し生徒に公開しているが、最近では専攻言語以外の教材にもアクセスし、楽しみながら複数言語に接する生徒も出始めるなど、当初の想定外の利用も見られるようになってきた。

こうした生徒の複言語学習に対する動きの気付きから、本校の中国・ロシア・韓国語指導教員をメンバーとする『初級複言語単語集』作成プロジェクトチームを立ち上げ、単語数、フレーズ数、選別のためのガイドライン、編纂方針の確認などの検討を始めた。その結果、まずは単語や表現の採用基準を以下のように定めた。

- ① 本校での中国語・ロシア語・韓国語学習において、3年間で学ぶべき単語や表現であること
- ② 本校での中国語・ロシア語・韓国語学習において、共通して学ぶ単語や表現であること
 (「天安門」「マトリョーシカ」「キムチ」など、各国固有の文化に根差した単語は除く)
- ③ 生徒間のコミュニケーションの場において、普段から用いられている単語や表現であること
 (「出張」「ポリエステル」「倉庫」など、高校生の日常会話での使用頻度が低い単語は除く)

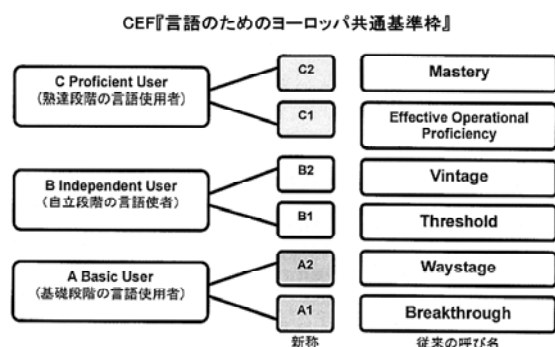
つまり、編纂方針として先ずは3言語の「核」となる単語を絞り込むことにしたのである。

また、今回作成しようとしている単語集があくまで生徒の興味と好奇心を原動力とする「自学自習教材」であることをメンバー間で再確認し、授業における指導とは直接的な連動をさせない副教材にすることも合意した。

2-2. どの程度の単語をどれくらい学ぶべきなのか ～レベルと語彙数の設定～

異なる言語を母語とする中学・高校生同士が自分の気持ちを伝えるために必要とする単語と表現は、どの程度のものをどれくらい用意すれば良いのだろうか。この点についての基準作りには CEFR における Can-do statement を大いに参考にした。

CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment、『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』) は複数の言語を対象と



© 2003 ヨーロッパ日本語教師会(AJE)CEF プロジェクト委員会作成

した学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠であり、ここでは言語の技能を「理解すること(聴く・読む)」「話すこと」「書くこと」に分け、それぞれ A1 から C2 までの6レベルに分けた自己評価表を示し、「～ができる (Can-do statement)」という形で自己評価が可能になっている。

この評価法を参考とし、本校の中国語・ロシア語・韓国語の各教科が3年間で目標としている到達レベルを「近隣語スタンダード」として整理してみた。

近隣語スタンダード

レベル	全体的な尺度	Reading	Writing	Listening	Speaking
K4 (上級者)	一般的なテーマや話題に関して、やや高度な表現を用いて自分の意見や感想を述べる事ができる。社会性のある話題について母語話者とコミュニケーションを図ることができる。 【到達レベル】※ CEFR B1レベル 中国語検定2級、ハングル検定2級	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
K3 (3年生)	指示された身近なテーマに関して、自分の意見や感想を述べたり、聞いて理解したりすることができる。興味関心のある話題についてやや複雑な表現を理解し、描写や比較ができる。 【到達レベル】※ CEFR B1レベル 中国語検定3級、ハングル検定3級、ロシア語検定3級	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
K2 (2年生)	日常よく使われる文や表現を理解し、基礎的な構文ができる。身近なテーマについて、短く説明したり、情報交換に応じたりできる。 ごく短い簡単な文章を読んでも理解することができ、個人的な手紙やメッセージを書くことができる。 【到達レベル】※ CEFR A2レベル 中国語検定4級、ハングル検定4級、ロシア語検定4級	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
K1 (1年生)	日常よく使われる挨拶表現と生活で必要最低限の表現を理解し、用いることができる。 名前、単語、単純な文を読んで理解することができ、書き記すことができる。 【到達レベル】※ CEFR A1レベル 中国語検定準4級、ハングル検定5級	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

その結果、3言語とも CEFR における A1 ~ A2 (基礎段階の言語使用者) レベルは、2年次修了時点での到達が十分に可能であることが分かった。ちなみに、2年次修了時点での習得目標語彙数は中国語が2,200、ロシア語と韓国語が1,500である。これらの現状確認を済ませた上で、『初級複言語単語集』の到達レベルは CEFR における A1 ~ A2、語彙数は1,500程度 (共に本校における2年次修了レベル) とすることでメンバー間の合意を得た。

2-3. どのような場面で気持ちを伝えあうのか ~具体的な単語選定の基準~

到達レベルと語彙数の設定を終え、具体的に単語や表現を選定する上でベースにしたのは国際交流基金と日本国際教育支援協会の共催する「日本語能力試験」N5 ~ N4 (基本的な日本語を理解することができる) で出題されるレベルの単語集である。

『初級複言語単語集』を用いて身につけた単語や表現を生徒達がどのような場面で用いるのかをメンバー間で討議した際、海外研修などで訪問するそれぞれの国の交流相手校やホームステイ先は当然であるが、日本国内において用いる機会も無視することができないとの意見が多数を占めた。東京都総務局統計部の公式サイト (<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/>) で公表されている平成24年1月1日現在の東京都における外国人登録人口は406,095人であるが、そのうち中国人が164,199人、韓国・朝鮮人が105,522人、ロシア人が2,053人となっている。登録人口すなわち生活者と考えると、生徒達の身近にこれだけの外国人が暮らしているのである。当然、街を歩くだけで彼等とすれ違うこともあるだろうし、地域コミュニティのメンバーであったり、クラスメイトであったりもする。その実感が薄い原因は、コミュニケーション手段の大半が、彼らの話す日本語力によるからに他ならない。その現状を打破し、相手にもう一步深く立ち入るには「相手の話す母語で語りかける」ことが一番の近道であり、『初級複言語単語集』作成の最大の目的はここにある。特に、中国語と韓国語においては

使用機会と頻度はかなり多いと思われる。

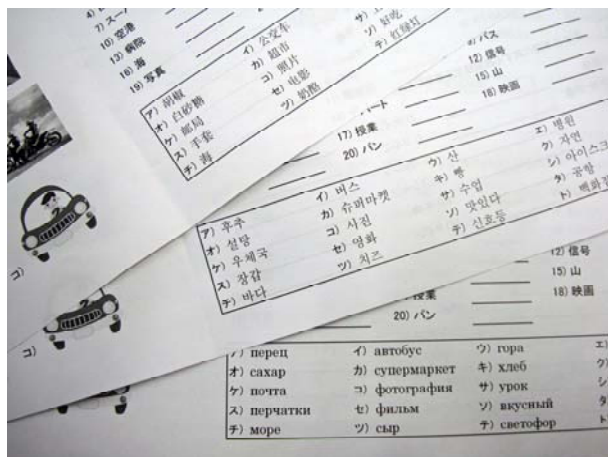
「日本語能力試験」N5～N4 出題レベルの単語内の選定においてはこのような用いられ方も考慮し、日本での生活に必要な単語や表現は、たとえ日本固有のものであっても可能な限り取り入れることにした。また、意味に幅のある単語は日本における意味を優先的に採用した。例えば日本における「お茶」の一般的なイメージは「緑茶」であるという視点に立ち、茶の種類が豊富な中国語訳においては「緑茶」に限定した。同様にロシアでは「お茶」イコール「紅茶」という文化背景があるため、ロシア語訳においても敢えて「紅茶」ではなく「緑茶」となる訳を選ぶなどの工夫をしている。

3. 関東国際高等学校における活用例 ～自学自習教材を越えて～

以上の経緯を経て完成した『初級複言語単語集』はあくまで自学自習教材であるが、学校単位で外国語教科の副教材としての活用も可能である。関東国際高等学校外国語科中国語・ロシア語・韓国語の各コースでは現在、以下のような方法で活用をしている。

- ① 定期試験における実力問題としての組み込み
- ② ①に連動させた E-learning 上の練習問題の公開
- ③ 3言語共通「ボキャブラリーコンテスト」の実施

定期試験にはこれまで、それぞれの教科が独自に試験範囲の中から E-learning と連動させた単語問題を組み込み、生徒の語彙力向上に取り組んできた。今年度の学年末試験からは『初級複言語単語集』の中から共通問題を作成し、より日常生活において使える語彙力の補強に取り組む。その準備として、現在、E-learning 上にも練習問題を公開している。



また、年間を通じて定期的に「ボキャブラリーコンテスト」を実施する計画である。現在、『初級複言語単語集』に収録されている単語を5等分し、1回の出題範囲を約300単語としてリスニング（選択・書取り）と筆記（分類・選択・書取り・翻訳）で計100単語の習得率を確認する問題を作成中である。

本校の外国語科では原則として第2学年修了後の春休みに約1ヵ月間の海外短期留学を実施している。このコンテストを夏・冬・春の長期

休暇明けに1回のペースで実施すれば、全ての単語を学習した上で短期留学に参加することができ、現地でのコミュニケーションにも大いに役立つであろうと考えている。

このような取り組みは、それぞれの言語教育を実施している他の中学校や高等学校でもアレンジをして展開することが可能である。試行版として完成した『初級複言語単語集』と「ボキャブラリーコンテスト」の出題例を公開することで、全国の教育現場において幅広く活用され、生徒のコミュニケーション能力がより向上することを願って止まない。